

対抗的記憶とナショナリズム

Counter-memory and nationalism

五味 澁 典嗣¹

¹大妻女子大学文学部日本文学科

Noritsugu Gomibuchi¹

¹Department of Japanese Language and Literature, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：記憶，ナショナリズム，近代化，足尾銅山，強制連行

Key words : Memory, Nationalism, Modernization, Ashio copper mine, Forced migration

抄録

東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故以後，アカデミズムや社会評論の場面で，足尾銅山と鉱毒事件の記憶がしばしば想起されている。稿者は，2016年度～2017年度にかけて何度か足尾地域を訪れ，フィールド調査・聞き取り調査を行った。急激な人口減少に直面している現在の足尾では，銅山関連遺構の「世界文化遺産」登録を目指す動きも見られるが，そこには，「いま・ここ」を起点とし，過去の問題を「解決済み」として取り扱う記憶と記録の選択的な統制が作用している。本稿では，足尾の先行例として長崎県旧端島炭坑（いわゆる「軍艦島」）の観光資源化の問題と照らし合わせながら，現在の日本における「日本近代」の語り方とその問題性について検討し，日本社会における記憶の資本化がナショナリズムと密接に結びついていることを明らかにした。

1. 召喚される「足尾」

2011年3月11日の東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故以後，間歇的にはあるが，足尾銅山と鉱毒事件の記憶が呼び戻されている。

もとより，原子力発電所事故による放射性物質の被害と足尾銅山が生み出した「鉱毒」とを同列に扱うわけにはいかない。また，銅の精錬過程で放出される亜硫酸・亜ヒ酸ガスによる大気汚染，銅山の産業活動を支えるために行われた森林の乱伐と山地の荒廃をもたらした豪雨・洪水被害にさらされてきた山元・上流地域と，銅やカドミウムなどを含んだ鉱山排水による深刻な農業・漁業被害に直面した渡良瀬川下流域との間では，被害地域でもあり原因地域でもある場所と，一方的な被害地域である場所という複雑な対立も横たわっている。だが，国策と密接不可分に結びついた産業資本が引き起こした深刻な環境被害という点で，また，土壌や水質に多大な影響をもたらす汚染物質を長期間にわたって慎重に管理することが求められることになったという点で，福島第一原子力発電所事故と足尾鉱毒問題とを類比的に捉える見

方には，一定の合理性が認められよう。

大庭健（2015）や佐藤嘉幸・田口卓臣（2016）は，福島第一原子力発電所事故以後の政府による諸対応・諸施策を問題視する文脈で，福島と足尾の連続性を見出し，「近代日本国家を貫く思考はつまるところ「見殺しの制度化」ではなからうか」（大庭^[1]），「足尾鉱毒事件のプロセスを追跡することで，私たちは日本社会に宿る構造的差別と，それに基づく公害の潜在的可能性とがどれほど根深いものかを認識できるのである」（佐藤・田口^[2]）と厳しく指摘している。研究者や思想家の発言だけではない。2013年10月31日に開催された天皇・皇后主催の園遊会で，山本太郎参議院議員が福島第一原子力発電所事故による被害と避難者の窮状，廃炉作業に従事する労働者の問題を訴える手紙を天皇に手交した出来事は——山本議員の意図はどうあれ——足尾鉱毒被害を明治天皇に直訴した田中正造のイメージと重ねて語られた。2014年には，NHK総合テレビが池端俊策作のドラマ『足尾から来た女』を放映（2014年1月18日・25日の計2回，各73分），番組の公式サイトには

「100年前の日本で“国によって故郷を奪われた人々”がいた」と、明らかに福島第一原子力発電所事故による避難を連想させる惹句が掲げられ、脚本を書いた池端は「故郷を失った者の戸惑いと怒りは歴史を越えて共通のものだと思う」との言葉を寄せた^[3]。直近でも、姜尚中(2018)は日本政府による「明治維新150年」キャンペーンと対峙しつつ、水俣病の歴史と足尾鉍毒による旧谷中村の「埋葬」の経緯とを接続させ、「日本の近代化」が、資本と国家による人間性の無視や蹂躪と引き換えに獲得されたものであることを読み出している^[4]。

稿者もまた、2011年3月以後のコンテクストで足尾を改めて発見した一人である。この間、2017年度大妻女子大学戦略的個人研究費課題「対抗的記憶のトランスナショナルな接続に向けて」の準備段階から、学外・国外の研究者と同道した機会を含め、足尾への訪問を重ねてきた。春から初夏、盛夏、晩秋、そして厳冬期と季節ごとに違った表情を見せる足尾の景観と、時の流れから取り残されたように野ざらしにされた銅山関連遺構の状況、もはや跡形もなく消え去り／消し去られてしまった記憶の現場をつぶさに実見する機会を得てきた。さらに、現地で頂戴したご縁から、現在も足尾で生活されている方々から、この地域の歩みや暮らしにかかわる貴重なお話をうかがうこともできた。

本稿では、以上のようなフィールド調査を踏まえ、足尾地域の歴史と記憶の現在を出発点に、国家・社会の公的な記憶と対抗的な記憶との関わりと齟齬について、稿者なりの視点を付け加えたい。

2. 足尾銅山における戦時動員の記録と記憶

足尾は東京から北西方向に100キロほど、群馬県と県境を接する栃木県北西部に位置している。

「日本百名山」の一つに数えられる皇海山(2,144メートル)、特別天然記念物「コウシンソウ」の自生地として知られる庚申山(1,892メートル)などの足尾山地に源流を發する渡良瀬川は、古代以来の長きにわたって流域の暮らしを支えてきた。

その足尾山地に属する備前嶺山(1,272メートル)が、いわゆる「足尾銅山」である。村上安正(2006)によれば、最も古い産銅の記録は1558(永禄元)年まで遡れるという^[5]。以来、1973年の銅山閉山に至るまで、約83万トンの銅を産出、明治期に古河市兵衛＝古河鉍業の経営となってからは、

名実ともに日本を代表する銅山として「富国強兵」政策のエンジンとなった。東海林吉郎・菅井益郎

(2014)によれば、19世紀末から20世紀初頭にかけて日本は「アメリカ、チリ、ドイツにつぐ世界有数の産銅国」だったが、その中で足尾銅山は、1890年代には全国産銅量の約30パーセントを、1920～1930年代にかけては15～20パーセントを産出、文字通り「日本資本主義の成立と発展に不可欠な役割を担ったのである」^[6]。

しかし、経済成長と利益追求を最優先した急激な開発が、足尾の山元のみならず、渡良瀬川下流域に甚大な鉍毒被害をもたらしてきたことは周知の事実である。いまなお「公害の原点」とも称される足尾は、その意味でも日本資本主義の歩みを象徴する地域の一つと言えるだろう。

一般に、炭坑や金属鉍山はヤマの盛衰とマチのそれとがリンクするが、足尾も例外ではない。1973年の閉山以後、人口の流出が加速化した。最盛期の1916年には38,428人を数えた人口は、銅山閉山時の8,966人から、1998年には3,954人にまで激減、2006年には、いわゆる「平成の大合併」で近傍の日光市・今市市・藤原町・栗山村との広域的な合併を行い、現在は日光市の一部となっている。日光市のホームページには、住民基本台帳ベースによる旧足尾町の人口は1,932人(男性923、女性1,009)と掲げられている。鉍山のマチという特性を考えれば、行政機関が把握している人口数が足尾の住民すべてをカバーしているとは考えにくい。だからこれはあくまで統計上の数字だが、最盛期の約5パーセント、閉山時から考えても約20パーセントにまで減少したことになる。

足尾の人口減少の現実、一連のフィールド調査・聞き取り調査の過程で何度も実感させられることになった。研究調査という観点で言えば、現在、足尾地域には公的な図書館施設が存在しない。このことは、地域の住民サービス・社会教育という観点で問題があるだけでなく、この地域に根ざした書籍や資料を集積し、保全し、活用していく場所が足尾にはない、ということの意味している。また、この地域には、公的な歴史・民俗資料館のような博物館施設もない。銅山閉山後、通洞坑の一部を観光用に改造・公開した公営の観光施設「足尾銅山観光」が1980年にオープン、2016年には入場者が850万人を超えたとの報道もなされた^[7]。

だが、これはあくまで観光施設という位置づけの場所である。銅山観光から至近、わたらせ渓谷鐵道通洞駅そばには、旧足尾町出身の長井一雄氏が私財を投じて設立した「NPO 法人 足尾歴史館」が開設されている。2005年4月の開館以来、現在は2万点を超える資料が収集・展示されているが^[8]、館のホームページには、従来「負の部分」でしか語られてこなかった足尾と足尾銅山の歴史的な意義と価値を改めて訴えることで「わが国の近代国家創りに、多大な貢献をしてきた歴史」を学び、「足尾銅山の残された産業遺産群」「足尾郷の深い歴史」と「光と影」「正と負」の両面をあわせ持つ地域」として語りついでいきたい、と紹介されている^[9]。この文言には、現在の足尾で地域の歴史と記憶を考える際の問題が書き込まれている。つまり、地域の価値を訴える際に、どのような「物語」が選び取られているか、どのような記憶を指して「影」「負」といった言葉が用いられるのか、ということである。



図1 足尾銅山の労務動員関連地図
(栃木県朝鮮人強制連行真相調査団. 遙かなるア
リランの故郷よ. 随想舎. 1998.)

そこで稿者が注目したのが、日中戦争・アジア太平洋戦争時の朝鮮人・中国人労働者の強制連行、戦争捕虜 (POW) の強制労働をめぐる問題である。先行研究に抛りつつ、足尾銅山の各種労務動員状況について確認しておこう。1946年6月の厚生省による調査「朝鮮人労働者に関する調査結果」には、1940年8月から1945年5月にかけて、計2,416人の朝鮮人が足尾銅山に連行・動員されたとの記録がある。この資料をもとに分析を行った古庄正は、足尾は「住友の別子銅山、三菱鉱業尾去沢鉱業所、藤田鉱業花岡鉱業所と並ぶ「超重点鉱山」であり、「金属鉱山の朝鮮人連行とその戦後処理の有り方を代表する」ものと位置づけている^[10]。中国人の強制連行は、東條英機内閣末期、1944年2月28日の次官決定「華人労務者内地移入ノ促進ニ関スル件」にもとづくものである。足尾では、1944年10月～11月にかけて、八路軍・国民党軍兵士の他、いわゆる「劳工狩り」の対象となった者も含め、計257名が連行、うち、約42%にあたる109名が足尾で命を落としている^[11]。

連合軍捕虜については、笹本妙子による詳細なレポートがある^[12]。笹本によれば、足尾に「東京捕虜収容所第八派遣所」が設置されたのは1943年11月10日（1945年8月に「東京第九分所」と改称）。当初はジャワで捕虜となったオランダ人兵士約250名が収容、足尾銅山で使役されたが、1944年7月、うち150名が日立市本山の東京第十二派遣所のアメリカ人兵士と入れかわる形で移動した。笹本は「反抗心強いアメリカ人を海岸地域に置くと、逃亡の恐れがあるので、山奥に送ったのだ」と書いている。1945年6月4日には捕虜の一部を足尾北部の野路又に作られた分遣所に移動させた。1945年9月3日の解放時には、245名（アメリカ人210、イギリス人32、他3）が収容されており、足尾での死者は24名。なお、この収容所では、軍人・軍属・民間人あわせて6名が、捕虜虐待の容疑でBC級戦犯として訴追されている。

図1に示したように、敗戦後の調査や各種の聞き取りから、朝鮮人労働者は通洞坑近くの中才地区、小滝坑近くの南夜半沢・爺ヶ沢の「興亜寮」付近、本山工場北方の高原木地区にそれぞれ集められていたらしいことが突き止められている。中国人たちは同じく「興亜寮」に集められ、連合軍捕虜収容所は通洞坑そばの砂畑地区に置かれ、のち野路又に移された。

稿者も、この間のフィールド調査の中で、地域の郷土史家の方に案内していただきながら、これらの現場を実見してきた。しかし、小滝地区は1954年に集落自体が「廃村」となり、庚申川を対岸に渡る橋がない現在、興亜寮などの跡地に足を踏み入れるには相当の覚悟とそれなりの山歩きのための装備が必要になる。明治期に亜硫酸ガスの煙害で「廃村」と集団移転を強いられた旧松木村に近い高原木も同様である。砂畑の収容所跡は現在足尾双愛病院の敷地となっており、野路又の分遣所（敗戦後は中国人労務者がここに移されたという）は2007年に閉校した県立足尾高校のグラウンドへと転用され、往時をしのぶよすがはない。朝鮮人・中国人に関しては、1997年に連行された朝鮮人労働者の葬儀も執り行った小滝地区の専念寺説教所跡地に「足尾銅山朝鮮人強制連行犠牲者追悼碑」と「仮墓標」が建てられ、現在も年に一度追悼式が行われている^[13]。それに先立つ1973年7月には、銀山平地区に総工費650万円をかけて「中国人殉難烈士慰霊塔」（図2）が建設され、盛大な「開眼法要」も行われた^[14]。前者については、昨年（2017年）に新たな木碑が設置され、後者は公的な追悼式典こそ1995年を最後に途絶えているが、草刈りなどの手入れは行き届いており、とくに荒れ果てているという印象はない。

これらのことからわかるように、足尾においてこうした戦時下の強制連行・強制労働の記憶は、別に隠されているわけではない。とはいえ、こうした記憶が積極的に語られているわけでもない。



図2 足尾中国人殉難烈士慰霊塔

3. 足尾と「軍艦島」——産業化される記憶

そのことは、日光市が足尾地区の観光資源開発を企図して申請を構想している「世界文化遺産」登録というフレームの問題とも深く関係しているように思われる。

日光市の公式ウェブサイトには、「足尾銅山の世界遺産登録に向けて」と題したページが掲げられている^[15]。そこでは、「足尾銅山は、明治以降の日本の近代化と産業化に大きく貢献したと同時に、日本で初めて社会問題化した公害とその対策の歴史でもあり、世界的にみても鉱業の発達とそれに伴う環境破壊とその対策の経緯といった視点で評価された遺産はなく、極めて稀な事例であると考えられます」と述べ、栃木県と日光市が共同で、まずは「世界文化遺産国内暫定一覧表」への登録を目指し、「足尾銅山——日本の近代化・産業化と公害対策の起点」として文化庁に提案書を提出した、と記されている。

「提案書」は同ページにアップロードされているが^[16]、そこで強調されているのは、足尾が近代日本における「公害対策」の先進地でもあった、という打ち出しである。曰く、田中正造の追及から「事態を重く見た政府は日本の鉱業の存亡をかけ、明治29（1896）年日本初の「予防工事命令」を発令し、以後徹底した対策を古河に命じた」「古河もこれに応え、厳重な工期のなか浄水場、廃石鏝の堆積場、脱硫塔の建設を完工した」。煙害についても「当時最新の技術による対策を講じ排煙中の有害物質の除去に努め」、最終的には「世界で初めて実用化に成功した「自溶製錬法」とそれに伴う脱硫技術によって」亜硫酸ガスの完全回収に成功した——。いまは記述の細部にはいちいち立ち入らないけれど、こうした記述が、いったいどちらの側を向いて書かれているかは明らかだろう。

すなわち、「世界文化遺産」登録のために用意された物語のフレームは、足尾を「公害の原点」ではなく、「公害対策の原点」として位置づけようとするものである。この物語の構図に従えば、足尾に関わる「負」の記憶は、あくまで技術革新によって乗り越えられる「困難」に過ぎず、最終的にはその「困難」に打ち克ち、公害の原因物質等の除去を達成した古河（と、古河にその対策を促した日本国家）のパターナリスティックな功績の方が謳い上げられることになる。つまり、この物語

の枠組みでは、古河（と日本国家）の責任は、鉍毒をはじめとする公害被害の救済や補償というよりは、一連の公害対策によって全うされ、解決されたことになってしまう。

そのことは、この「提案書」が何を「文化遺産」として登録しようとしているかという問題と直結する。「提案書」は、「資産に含まれる文化財」として、「採鉍」「選鉍」「製錬」「動力」「輸送」と、足尾における産銅・製錬工程にかかるものに加え、製錬所排水の浄水場と廃泥・廃石鰯の堆積場（「浄水」）、古河の工場と迎賓施設・役宅（「経営」）など25件を列記している。だが、いわゆる公害の被害にかかるものは、「景観」の枠で掲げられた「松木地域旧三村」趾だけである。例えば、現在赤倉地区の龍蔵寺には、旧松木村にあった墓碑・墓石を集めた「慰霊塔」が作られている（図3）。そこには、元禄時代にまで遡る墓石もあって、自然豊かな村だったという旧松木村での生活の営みをうかがい知ることができるが、先掲の朝鮮人慰霊碑や中国人慰霊塔はもちろん含まれていない。過去の位置付けに関して論争的になりうる記憶の場所は、基本的に極力排除されているのである。



図3 旧松木村無縁石塔

加えて気になるのは、「浄水」関連の構成資産として、「中才浄水場」が挙げられていることだ。ここは1897年の政府による「鉍毒予防工事」命令で設置された濾過・沈澱施設で、重金属類を含んだ廃水を中和し、沈澱物は通洞駅すぐ上のダム施設

「箕子橋堆積場」に輸送されている。すなわちここは、いわゆる歴史的な「産業遺産」ではない。いまなお現役の施設なのである。ちなみに、箕子橋堆積場は現在も古河機械金属が私有地として厳重に立ち入りを制限している（年に1~2度、地域住民を対象とした「見学会」が開催されている）が、google mapの衛星写真でもはっきりわかるほど、鉍滓で赤茶けた水面が観察できる。古河側は、「震度6強クラス」の地震にも耐えられるとしているが、万一決壊が起きれば、現在の足尾地域の中心部は壊滅的な打撃を受けることになる^[17]。

この一事からもうかがえるように、足尾の鉍毒は、決して歴史的な「事件」ではない。現在進行形の「問題」なのであり、堆積された過去の鉍滓や廃水・廃棄物は、今後も慎重な管理が必要なのである。例えば、わたらせ渓谷鐵道原向駅の近くにある「源五郎沢堆積場」は、1958年に決壊、下流域の農地に大きな被害をもたらしただけでなく、2011年の東日本大震災時にも土砂崩れが発生、鉛を含む堆積物が渡良瀬川に流出した。古河機械金属は、下流域住民の声も受け、すでに使われていないいくつかの堆積場でも、強度を補強する工事を実施する予定としている（稿者も、フィールド調査の過程で、この工事現場を何度か実見することになった）。つまり足尾は、過疎と荒廃の中で忘却の淵にさらされながら、いまなお鉍毒という名の爆弾を抱え込み続けているのである。

なお、2018年現在、文化庁が「世界文化遺産」申請の準備リストとしている「我が国の暫定一覧表記載文化遺産」計8件の中に、足尾銅山は含まれていない。銅山閉山40年を迎えた2013年には、『読売新聞』栃木版が連載記事「伝える・足尾再生」を掲げ、その中では、栃木県選出の元衆議院議員・森山真弓氏が「足尾銅山の世界遺産登録を推進する会」会長として活動していることが紹介されたが、その後の動向は不明である。2014年には、隣県の群馬県で「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録されたことを受け、栃木県選出の参議院議員でもある上野通子文部科学政務官

（当時）が足尾を視察、政府が創設を検討中だった「日本遺産」について、「足尾銅山が第1号に登録できればいい」と語ったことが報じられたが、続報は出ていない^[18]。日光市も教育委員会事務局内に「世界遺産登録推進室」を設置しているが、現在の活動については不明である。すでに「日光

の社寺」が世界遺産登録されており、外国人観光客の急増とインバウンド消費の伸びに湧く日光市にとってみれば（2017年に日光を訪れた観光客は1,200万人を超える）、足尾の世界文化遺産申請の優先順位は高くない、ということなのだろう。

もちろん、稿者にとっての問題は、足尾銅山の観光資源化の成否ではない。いわゆる「ダーク・ツーリズム」のように、地域にとっての経済効果を重視する方向性は、産業遺産・文化遺産の保全につながることは確かだろうが、日本語の文脈で「ダーク・ツーリズム」論議を主導した井出明が「いみじくも語ったように、この議論の背景には、従来の修学旅行などでの歴史にかかる教育啓発活動が「悲しまなければいけない」という感動の押しつけや、政治的主張に対する拒否反応」がある^[9]。少なくとも井出が言う「政治的主張」とは、例えば、近代日本の歴史を問い直し、過去の日本国家が行った加害責任・植民地支配責任を捉え返す行為を指すことは明らかだろう。そこでは、「日本の近代化」という「大きな物語」を一方で肯定し、その存在を前提としたうえで、「悲しみ」「憐れみ」という感情を経済活動へと解消・還元する方向性が主張されているのだ。稿者は、いみじくもその実例を、2018年3月に訪れた長崎県旧三菱端島炭鉱（いわゆる「軍艦島」）で目の当たりにすることとなった。

足尾銅山観光と、いわゆる「軍艦島」見学ツアーとは、基本的な構造を同じくしている。いずれも戦時下の強制連行の記憶を抱える場所であり、かつての鉱山／炭坑のうち、入口付近の部分を見せられてよい場所「見せられる場所」として集中的に整備し、それ以外の場所への立ち入りを認めていない。ただし、「軍艦島」の場合は、土地の所有権が三菱マテリアル（当時）から旧高島町に無償譲渡され、市町村合併で最終的には長崎市の資産となっている。また、2015年の「明治日本の産業革命遺産 製鉄、製鋼、造船、石炭産業」の世界文化遺産としての認定も追い風となり、急速な観光地化が進められている。ここでは、東京の広告代理業者なども参入、最新のデジタル技術を駆使した3Dを含む大がかりな映像イメージの展開と、旧島民の心温まる語りの集積、さらに「地域おこし」で用いられる「ゆるキャラ」までも組み合わせることで、高度経済成長期の庶民の暮らしの表象を軸として、いわゆる「負の記憶」を徹底的に

排除した「漂白された記憶」が表現されている。

「軍艦島」への上陸が解禁されたのは2009年度からだが、2014年には上陸者数がのべ50万人を突破、長崎市の統計によれば、2016年度には1年間で265,555人が「軍艦島」を訪れている^[20]。上陸解禁後の3年間で、地域に65億円程度の経済効果があったのではないかと試算もある。

おそらくは、足尾銅山の世界文化遺産登録が目指す方向性は、こうした「軍艦島」における記憶の産業化と一致していると見てよい。というより、いまや「軍艦島」は、廃墟の観光資源化・観光産業化の一つのモデルとなっているとも言えるだろう。1990年代以降の足尾銅山における「産業遺産」化に向けた取り組みを追いかけた周藤真也（2012）は、「産業遺産化は、一般にそれがもつ「否定的側面」を消去し、「肯定的側面」を美化する」構造があると指摘する。さらに周藤は、鉱毒の発源地としての足尾が渡良瀬川下流域との間で深刻な葛藤を抱えており、世界遺産登録候補としての申請に際して、下流域の団体から日光市に抗議が寄せられたことも紹介している^[21]。

あくまで成功譚としての「日本の近代化」という物語への貢献が前景化される以上、その「影」の部分、「負」の記憶は、従属的な位置しか与えられないか、そもそも言及されることがない。たとえ言及されたとしても、その「影」の部分、「負」の記憶は、あくまで発展史観・進歩史観的な語りにも回収することができる相対的なものにしか触れられない。過去にその場所その地域で何があったのか、誰が、どんな苦役や被害にさらされたのか、どんな種類の対立があり、抵抗があり、支配＝被支配の関係が地域に刻みこまれていたかには、本質的に関心が向かないのである。

その記憶の現場をめぐって、現在もなお抗議や批判の声を挙げている人々が存在していることは後景化され、対立や葛藤の歴史は、あくまで「いま・ここ」から切り離された過去のエピソードとしてのみ語られる。その場所を訪れることでノスタルジックな感傷にふけったり、悲しみの過去を追懐したりすることはあったとしても、その情動は、あくまでそのような労苦にさらされていない。「いま・ここ」の相対的な幸せを確認するために呼び起こされる一時的なものでしかない。歴史への本質的な問いや、現在に対する異議申し立てに向かうことはないのである。そのような物語の構

図の中に、「日本近代」の大きな物語自体を揺さぶりかねない、朝鮮人・中国人強制連行の記憶や、連合軍戦争捕虜の強制労働とBC級戦犯の問題をめぐる記憶が入りこむ余地はないだろう。そうであるからこそ、訪れた観光客は、「日本近代」のナショナルな枠組みを逸脱しない物語の中で、安心して悲しみ、感傷の中でまどろむことができる。

そのように考えれば、こうした近代化遺産・産業遺産の観光資源化は、まさに「記憶の資本化」という形で進行する現代日本におけるナショナリズムの一形態と考えることができそうである。現在、文化庁は、「地域の歴史的の魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリー」を「日本遺産」として認定、文化財の保全に加え、地域のブランド化による地域住民のアイデンティティの確認や経済活性化を支援する活動を展開している。2018年現在、「日本遺産」には計67件の「ストーリー」が登録されている^[22]。日本列島にいかにも多くの「ストーリー」が溢れているかがイヤでも伝わってくるが、その中には、日本近代の軍事基地をめぐる物語も含まれている。こうした「ストーリー」が、ナショナリズムの枠組みにとっての他者とどう関わっているかは、さらに検証を進める必要があるだろう。

謝辞

本研究は、大妻女子大学戦略的個人研究費課題(S2926)の助成を受けたものである。

引用文献

- [1]大庭健. 民を殺す国・日本 足尾鉍毒事件からフクシマへ. 筑摩書房. 2015.
- [2]佐藤嘉幸・田口卓臣. 脱原発の哲学. 人文書院. 2016.
- [3]NHK 土曜ドラマ「足尾から来た女」公式サイト.
<http://www.nhk.or.jp/dodra/ashio/>, (参照 2018-6-22)
- [4]姜尚中. 維新の影 近代日本一五〇年, 思索の旅. 集英社. 2018.
- [5]村上安正. 足尾銅山史. 随想舎. 2006.
- [6]東海林吉郎, 菅井益郎. 新版 通史・足尾鉍毒事件 1877~1984. 世織書房. 2014.
- [7]無署名. 「足尾銅山観光」850万人 37年目. 読売新聞 (栃木版). 2016-8-16.
- [8]無署名. 「伝える・足尾再生3 「鉍都」の繁栄模型で再現. 読売新聞 (栃木版). 2013-3-15.
- [9]NPO 法人足尾歴史館サイト.
<http://ashiorekishikan.com/ashiorekishikan>, (参照 2018-6-25)
- [10]古庄正. 足尾銅山・朝鮮人強制連行と戦後処理. 駒澤大学経済学論集. 1995, 26(4), p.1-95.
- [11]猪瀬建造. (増補改訂版) 痛恨の山河 足尾銅山中国人強制連行の記録. 随想舎. 1994.
- [12]笹本妙子. 東京第九分所. POW 研究会ウェブサイト.
http://www.powresearch.jp/jp/pdf_j/research/tk09_ashio_sunahata_j.pdf, (参照 2018-6-28)
- [13]無署名. 足尾朝鮮人強制連行犠牲者追悼式 日朝市民60人が参加. 朝鮮新報. 2015-8-11.
- [14]強制連行中国人殉難労働者慰霊碑資料集編集委員会. 強制連行中国人殉難労働者慰霊碑資料集. 日本僑報社. 2016.
- [15]日光市公式ホームページ.
<http://www.city.nikko.lg.jp/bunkazai/gyousei/shisei/sekaiisan/index.html>, (参照 2018-6-28)
- [16]日光市・栃木県. 世界遺産暫定一覧表追加記載提案書.
<http://www.city.nikko.lg.jp/bunkazai/gyousei/shisei/sekaiisan/documents/ashiodouzan-teiansho.pdf>, (参照 2018-6-28)
- [17]無署名. 足尾銅山 山元調査 土砂流出防止早く 堆積場の強化要望 渡良瀬川鉍毒根絶同盟会. 毎日新聞 (群馬版). 2017-11-8.
- [18]無署名. 日光への観光客, 初の1200万人超え 2017年. 下野新聞. 2018-3-24.
- [19]無署名. ダークツーリズムの受容 負の記憶 哀悼と継承. 読売新聞. 2013-11-4.
- [20]長崎市. 平成29年版長崎市統計年鑑(統計表).
<http://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/750000/754000/p031086.html>, (参照 2018-06-26)
- [21]周藤真也. 3・11から足尾へ 旧足尾銅山における〈知〉の政治の現在. 早稲田社会科学総合研究. 2012, 12(3), p.1-12.
- [22]文化庁ウェブサイト. 「日本遺産 (Japan Heritage)」について.
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/, (2018-06-27 参照).

(受付日: 2018年6月29日, 受理日: 2018年8月24日)

五味渚 典嗣 (ごみぶち のりつぐ)

現職：大妻女子大学文学部日本文学科教授

慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程単位取得退学，博士（文学）

専攻領域は近現代日本語文学・文化研究。現在は，おもに戦争・アジア太平洋戦争期の日本語による戦争や戦場の表象とメディア統制とのかかわりについて考えている。

主な著書：『言葉を食べる—谷崎 潤一郎，1920-1931』（世織書房，2009年），『コレクション・モダン 都市文化 96 中国の戦線』（編著，ゆまに書房，2014年），『谷崎潤一郎読本』（共編著，翰林書房，2016年）ほか。